The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	河井寛次郎における戦時下の「思想上の転機」 : その背景と展開
Author(s)	宮川, 智美
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56268
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

河井寛次郎における戦時下の「思想上の転機」
── その背景と展開

宮川智美／お茶の水女子大学大学院博士後期課程，日本学術振興会特別研究員

本発表では，近代の陶芸家として知られる河井寛次郎（1890-1966）が，自ら「思想上の転機」と位置づける太平洋戦争中の動向を採り上げる。

先行研究では，戦後の作風への節目と位置づけられるものの，造形作品が残されていないため，具体的な言及はなされてこなかった。

しかしこの時期は，次の三点において重要である。まず，河井本人が「転機」として強く自覚している。次に，戦後の創作活動 ── 陶芸に限らず，詩作や随筆を含む ── に直接的に繋がる。そして，当時の文章から窺える思索の過程には河井の特徴がよく表れている。つまり，学生時代以降に身につけた制作技術と，宗教的な生命観との間に形成した，彼の科学的知識に基づく世界観が明確に窺えるのである。

１．背景

まずは，当時河井が置かれていた状況を，背景として確認する。

制作環境に影響を及ぼしたのは，奢侈品等製造販売制限規則（1940年）などの統制である。彼はこの例外として，芸術保存の対象となる推薦作家であったと推測されるが，燃料資源の不足や灯火管制から影響を受けないはずはなく，1943年から個展を中断し，1944年11月から終戦後の12月までは自作の焼成が出来なかった。一方，軍から請け負った兵器を製造する窯業工場に出入りし，また町内会長を務めるなど，戦争に積極的に関らざるを得ない立場にあった。

焼成の中断による影響として最も重要なのは，故郷を題材とした文章を書き始めたことである。彼は，「思い出すこと」と題した原稿の執筆に加え，毎日の詳細な日誌を記している。『毛筆日誌』（河井寛次郎記念館蔵）は，1944年から1947年までの日誌で，一日の行動や思索の跡が詳細に記録されている。今回は「転機」と関わる箇所を中心に参照した。一方，「思い出すこと」（現存せず）は，発表を前提とせずに1943年末から，故郷の食材や調理法を記した原稿である。毛筆日誌には，原稿執筆の進捗状況が細かく記されており，これが戦後発表された多くの随筆とほぼ一致するものであることが分かる。戦後は没するまで，同じ題材で文筆活動を行っており，彼の思想の根本は戦時中の焼成が出来ない時期に形成されたと言える。

２．思索の過程

こうした思索の過程を，機械・生物学的関心・食と故郷という三点から辿りたい。

河井の一つ目の「転機」は，機械に対する認識の変化だと捉えられる。彼は「コウモリ」という原稿の執筆時に，人間が飛行機を作る過程を，蝙蝠が翼を獲得する進化の過程と重ね合わせることで「機械と手とが一つだ」という「機械ニ対スル見方ノカクメイ」（『毛筆日誌』1944年７月16日）に至ったと言う。機械とは，執筆の構想段階では戦闘機や潜水艦などを指したが，後に兵器以外についても人間の身体の一部と捉えるようになる。

機械の捉え方の変化を「進化」に例えたことにも暗示されるが，動物の体の発達と人間の道具との対比には，彼の生物学的な関心が

窺える。日誌に言及のある，ワトスンの『生物誌』（創元社，1940年）には，河井の文章との類似が認められる。弟子の高橋一智によれば，河井の愛読書には生物学の文献が多く含まれ，特にファーブルの『昆虫記』は「体得」していたという（『陶心隧道』緑の苗豆本の会，1974年）。河井は，直接的に昆虫をモティーフとした作品も残しているが，むしろ重要なのは，自然科学の世界観を内面化した点にある。当時生物界を語ることは，「ダーウィニズム」に代表される，自然科学に影響を受けた世界観を伴うものであった。

これを踏まえて，戦時下のもう一つの転機を，食と故郷への関心として見ていく。河井は散歩中に見た，葉っぱを喰う虫の光景を「争闘ノ修羅場」から「自然ノ大調和」に読み替えた。ここでは，自然界の法則に戦時下の国際情勢を対応させている。同時に，食料事情の悪化に伴い，食べ物は食欲の対象として以上に重要視される。彼は随筆の中で，故郷の食生活の文化的側面を強調している。河井は『昆虫記』などを理論として参照しながら，文化的側面をも含めて，食べ物として取り込んだものを創作の源とする考え方を獲得した。彼にとってその創作の源は，回想される理想化された故郷に求められ，彼のアイデンティティを形成したと言える。

３．造形物への投影

ではこうした思索の深まりは，実際の造形物にいかに投影されたのだろうか。

戦時中は，創作活動が制限されていたため，完成されたものに眼差しが向けられた。京都の植田という美しい村について書いた「部落の總體」（『月刊民藝』６巻７号，1944年７月）では，機械についての認識と同様に，家とそれを作った人間は同一視される。村は，これらの家が美しい比率で配置されて形成されており，河井はこれを「偉大な設計者」による仕事だと考える。これは『生物誌』に登場する，互いに作用し合うユッカという花とプロヌバという蛾の関係を参考にしている。つまり集落を形成する建築などは，ある特定の集団がもつ生物学的な習性と同じように，無自覚のうちに，互いに自然と調和状態を保つように構成されたと捉えている。

戦後の活動を見ると，彼のスクラップには電車の連結部やオート三輪が含まれ，創作にあたり陶器以外をも広く参照したことが分かる。木彫面を「スクーターからもらった顔」と言う背景に，機械を身体の延長とする見方があることは容易に想像でき，人間の表現として受け入れ関心を高めたことが窺える。

食への関心から，自らの創作の源を故郷に求めたことは，河井の晩年の造形にも反映される。河井は，故郷の瓦器を「激愛」したとされ，出雲の焜炉と河井の扁壺（《鉄釉三色打薬扁壺》1963年，個人蔵など）には，造形上の類似が指摘できる。彼は，こうした瓦器に「出雲の造形の血」を見出しており，自らの創作においても，その実現を試みたと考えることができる。

以上のように，河井寛次郎の「思想上の転機」を軸に，機械・生物学的関心・食と故郷という三点から，戦争中の彼の思索を辿った。生物学的関心は，河井の「科学的」な思考法となり，機械という技術に対する認識や，生命と関わる食と故郷への関心を体系づけた。これにより，実生活上の困難は，戦後の創作へと昇華されてゆく。彼の芸術は，これらが互いに重なり合い，成り立つものだろう。

河井の到達点である戦後から晩年にかけての創作活動は，造形・文筆ともに，戦時中の動向と強く結びついている。この時期を，節目として切り離すのではなく，連続的に捉えて評価する必要があると考える。